

Jヴィレッジ高濃度汚染土のゆくえ

——被曝管理なく密かに再利用された汚染土、
保管場所の明らかでない高濃度汚染土

おしどりマコ

記者(L. C. M. Press 主宰)、芸人(落語協会・漫才協会所属)

「Jヴィレッジ」をご存知だろうか？ 福島第一原発事故後、収束作業の拠点となっていたサッカーのナショナルトレーニングセンターである。福島第一原発から南に20 km、楡葉町と広野町にまたがる。福島第一原発・第二原発と近隣に原発10基を建設した東京電力が130億円を投じて建設し、1997年に福島県に寄贈した施設だ。寄贈しただけではない。Jヴィレッジを管理するのは「株式会社Jヴィレッジ」でその歴代社長は福島県知事、副社長はJFA 理事と東京電力役員が担ってきている。

原発事故後、収束拠点となっていたJヴィレッジは東京電力による「原状回復工事」がなされ、2019年4月に全面営業再開された。そして「復興オリンピック」の象徴として、2020年3月、聖火リレーのグランドスタート地点となるはずだった。

2020年4月、筆者は東京電力がJヴィレッジにおこなった「原状回復工事」の詳細を福島県に情報開示請求した。すると、請求内容や筆者の個人情報に東京電力に漏れていた¹。なぜ福島県は個人情報を東京電力に漏れさせたのか。原発事故の加害者である東京電力と、被害者である福島県は、なぜ馴れ合っているのか。

Jヴィレッジの「原状回復工事」には、実は大きな問題が複数ある。福島県、東京電力、環境省と一体となって、それを隠そうとしている。複雑な問題だが、それをぜひ把握していただきたい。

[目次]

1 情報をなかなか公表しなかった東京電力：

問題発覚の経緯

- 2 作業員の放射線防護ができていない：除染電離則違反の可能性
- 3 除染廃棄物の管理ができていない
 - 3-1 5万1000 m³の除染土の再利用→濃度と再利用先が不明
 - 3-2 118 m³の高濃度廃棄物→保管場所不明
 - 3-3 環境省の除染計画から外れたため、汚染対処特措法が適用されていない

1 情報をなかなか公表しなかった 東京電力：問題発覚の経緯

2019年10月、国際環境NGO グリーンピースがJヴィレッジ周辺の空間線量を測定し、高線量地点を見つける。それらの地点の除染とモニタリングを求める書簡を、11月に環境大臣、福島県知事、IOC 会長、JOC 会長宛てに送る。12月、環境省と福島県と東京電力が協議し、それらの地点を東京電力が除染することになる。東京電力は「原因などを含め詳しく分析する。その結果を踏まえ、適切に対応する」とコメントを出していた。

ここまでは既出の報道である。では、その分析結果は？

2020年2月9日に筆者は、その高線量箇所の除染土壌が福島第二原発に保管されていると情報提供を受ける。翌10日の東京電力会見で分析結果を問うも「どういう状況か詳細を確認」「答えられるかどうかも含め検討」となる。しかし13